



ステップス企画の展覧会である。吉岡まさみは批評文を作品のように飾り、作品をキャプションの如く扱う。このような展覧会は、日本の歴史上初である。吉岡は画廊入り口にマニフェストを貼った。ポワンカレの『科学と仮説』の一節を引用し、美術に言い換え、「科学には理論が不可欠であり、家を建てるには建築家が必須である。／では美術はどうか。／作品を美術たらしめるものは何か。／それが批評である」とする。

吉岡は学芸員を除く美術批評家と名乗る人物に片っ端から参加を呼びかけ、四人の批評者が集った。仙仁司、本江邦夫、ワシオ・トシヒコ、宮田である。本江は吉岡の参加を仰ぎ、吉岡は受けた。仙仁は大宮政郎、本江は三輪めぐみ、吉岡は槇野央、ワシオは岩崎巴人、宮田は小池野豚を選出し、展示は吉岡が行った。ミクストメディアの大宮と小池、油彩の三輪田、彫刻の槇野と全く異なる素材と主題に満ちた、確かに批評が中心となった展覧会である。

仙仁は大宮の人生を鎌倉行動派のように語り、本江は「そこにあった」三輪田の作品を詩的/私的に記し、宮田は今日の現代美術の動向を交えて論じ、吉岡はお笑いを例に出して現代美術を洞察し、ワシオは日本の批評界に皮肉を込めながらも冷静に岩崎を分析する。それぞれが全く異なった方法論で批評を展開し、美術館のキャプションとは異なる内容だ。難解な印象を持つ「美術批評」の世界が、少しでも身近になってくれればと出品者として願った。

吉岡としては展示する批評に全てを語って貰いたかったのだろうが、本江の発案で18日(木)にトークセッションが実現した。吉岡は展覧会直前まで滞在したセルビアの状況に触れて現代美術内で内輪揉めをしている暇はないと発言し、仙仁は現代美術を見なければ現代が分からないことを強調し、在野で活動するワシオは徹底的に美術のプロパーの仕事に喝を入れ、美術関係者ではない一般の人々に届く声を上げなければならないと主張した。本江はこれまで依頼されて原稿を書いたことしかなかったのが、今回はじめて、自主的に論じたことを明かした。宮田は司会に徹しつつ、現代美術の世界では作者と批評者は共通の主張を見出し、現代と対峙すべきだと主張した。

後に府中市美術館の武居利史がFBで指摘してくれたように、批評論を互いに闘わせるよりも、各人の批評の動機が多く述べられた。翻れば、それ程までに「美術批評」の力は衰弱している。「美術批評」とは記録でもなく、個人の感想でもなく、研究的な客体でもなく、哲学の演繹でもない。現代美術と同様に、明かし得ぬものなのだ。権威にならず批評を携えることの重要性を、多くの者に、広く知って貰いたい。

